

---

# うろんな+せいぶつ

夢猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

うるんな+せいぶつ

### 【Zコード】

Z8526

### 【作者名】

夢猫

### 【あらすじ】

現代的オカルファンタジー。

不可思議事件に取り組む公務員たちのお話。

出会いは突然?はん、冗談。思いつきついに前置きあつたじゃん。（前

気軽に読める読み物を用意します。

出会いは突然？はん、冗談。思いつきりしつこに前置きあつたじゃん。

退屈してたのは事実だし、確かにいつもと違う破天荒を求めてたのも事実だ。けどさあ・・・。とびきりすぎだつて！

出会いは突然？はん、冗談。思いつきりしつこい前置きあつたじやん。

「ん～やあつぱり」「ねつて持つてるもんだよな」

何のだ？

おめえこそ誰だつづの。最近断りもなしに、人の頭ん中でしゃべんな。

なんのつで、この場合今この瞬間、話題大沸騰中の私立博物館。今時珍しいオカルティクな大ニュース！知りたい？知りたいよな？知りたいって言えよ。

.....。

無視かこの野郎。…ま、静かでいいけどさ。

気を取り直して、俺は朝日に輝くでっかい建物を見上げる。顔が勝手に笑いそうだ？

「はー今朝のニュース見た時はジョーダンだと思つたけどー、いやー、ま・さ・か マジだつたとはー」

ティラノの骨格標本が動いた！！

朝飯食つのにテレビつけたら、キャスターが大興奮してんのか。当然、俺は突っ込んだ。

いやいやいや、ありえねえよ？

でもさ、面白いよ。久々にな。だから、館長やつてる叔父様にガソワしてみたら、怒り狂つてんじやん？

何処の不届きモンが、私のティラノを～～～～！

てさ んで、怒りで訳わからなくなつてるトコつけ込んで、現場に入れてもらうことにした。フォーカスさん達が舞いてる正規の玄関なんて、使わねえ よ？俺だけが知ってる、マル秘の入り口。職員用の非常はしごのブース。もちろん、はしごは下りてないけど、裏だからって手入れをサボりまくつたが、枝延ばしてんだ。木登り

は得意よ、俺。

「さつて、開いてるかな？」

そこの一階の非常扉前にたって、ノブを回すと。

「おつけい 叔父様ナーライス」

ちゃんと開けといてくれた。やつたね

入ると独特の匂いがする。なんだろな、古いものの匂いつて言うか、歴史の香りっていうのかね。此処にある叔父様のコレクションがどんな価値があつて、すごいもんかなんて、どもでもいいんだけど。俺、こういう空気、好きよ。なんか、居心地いいんさ。だから、入り浸つてんさ。半分は、叔父様の入れてくれる茶と菓子目当てだけだ。

館長室にいないうから、事件現場に行つてみるか。職員用通路つていいよな。余計な人間にあわねえし。

恐竜の展示場は二階。学芸員がするような、白い手袋をはめる。一応「お手伝い（バイト）」扱いで入れてもらつてるかんね。ケーサツいるんだろうし、摘まみ出されちゃたまんねえよ。

「展示室とーちやく。叔父様は…っと」

「お。いたいた。

「叔父様！」

声を掛けたけど、叔父様はバーストして耳に入つてねえ。

「ちよつ、そこー不用意に触るんじゃありません……素人がつ……」

あ～あ。ホントに頭に血が集まり過ぎ。確かに、バラバラになつたティラノはけ悲しいけども。背後まで言つて声を掛けた。

「叔父様つて！けーじわんにやむ事こいつ、あらぬ疑いかけられんぜ？」

がばつと、振り返つた叔父様は俺にまで怒鳴つてきた。

「遅い！空君！…ここからこの不届き者共を何とかしなさい！私の『レクションを乱暴に扱う輩は許しません！…』

…ダメだこりゃ。

…いつもなら話にならねえことば、身内はみんな知つてゐるから、職員の皆さんも苦笑い。

そん時だよ。初めて奴等の顔見たの。

俺が叔父様のマシンガントークの矛先を、どつかよそに擦り付けてやろうと企んでゐるトコに、やつひらがやってきた。入り口から堂々と。

「ん？」

なんつーか、異常に田立つ奴等が来てんじやん。なんだあれ。ケーサツにしちゃ若いけど、特に止められもしねえまま、突き進んで来んぞ？

…なんかヤ …な予感。

とか考へてる間に、來た來た來た來た。なんつーか、独特な空氣纏つた集団が。

「…失礼。館長さんでいらっしゃいますか」

年上っぽいにこさんが、暴走街道まつじぐらな叔父様に向かつて、無謀にも声をかけて来やがつた。…空氣を読め空氣を。

「はー?何ですかあなた方はー?」

ほれ、氣立つてゐる氣立つてゐる。ただでさえ機嫌最悪のといひに、そんなよれよれしたスース中途半端に着て、超エアリーな寝癖ヘアで挨拶なんぞ…。

「出て行きなさいー私のコレクションに蟲や虱がついたらどうくれるんですかっ!—」

…それみる。普段ならぜつてえ言わねえよつた暴言が出た。どつすんだメガネだけはオシャレなお兄さん?

「いえいえ、ちゃんと毎日シャンプーしてますので」

嘘つけ。とか、おそれく監が心ん中でシッコンだ。けども、このにこさんときたら、

「私達にこいつ者です」

そ知らぬ顔して名刺を差し出した。

おお、動じないんか。鉄の心臓だな。…で?ビうこいつ者だつて?  
伯父様、早く受け取れー。俺に見せろー。

「…叔父様、差し出された名刺は受け取つてやんなよ。いくらアボなし訪問にしたつて、失礼だろ」

何時までたつても、叔父様が名刺を取るうとしないから、言つてやると、しぶしぶといった体で、英國紳士ルックの叔父様は、名刺交換をした。メガネ のにいさんが、俺に目配せする。

どうも。助かつた。

叔父様の後ろでこつそり、右掌で扇ぐようにして「いえいえ」と応えると、その兄さんの後ろについていた人と目が合つた。

お。美人じやん。

ながい黒髪に黒目。人形みたいな整つた顔。愛想はなさそうだけども、こんだけ顔が良ければな。歳は俺と同じくらいかな。高校生ぐらい。ここにいる つて事は、ケーサツ関係かな。叔父様の手の名刺を見て、読み上げてみる。

「警察機構…チョウジヨウゲンシヨウタイサクカ?…本部長…菊池秀司。へえ…警察つて手帳のイメージだけど、名刺も使うんだ」

「あ。手帳もありますよ」

そう言つ声に顔を上げると、何時の間に出したんだか、二人とも黒い手帳を提示してた。見ると、なんかまた、ちょっとイメージと違うんだ。例の警察のエンブレムは小さめで左上についてるだけ。あとは、スタイリッシュな身分証みたいだ。

「捜査官、夏城翠…十七歳？若っ！」

例の美人さんの年齢に、つい口滑らした。だつてさ、タメで警察勤めつてどうよ？びっくりするわ。

「…アンタは？」

おお、口利いたよ、夏城さん。おちついたアルト声。

「俺はバイト。名前は永月<sup>ヒサキ</sup>。奏華学園高等部一年A組。これ学生証いる？」

「…永月といふことは、永月館長の…」

「館長の兄の末っ子。奏華学園の理事長の孫。な、おじや…」

…ヤバイ。

振り返つてみたら叔父様の顔が怒りで青白いぞ…。「…なると…」トログリセリンなんだこの人は。さりげなく離れとけ離れとけ。

「…超常現象対策課？十七歳？貴方が本部長？…」

叔父様がブチギレるのは早い。肩を震わせて、館内に響き渡る声で絶叫。

「人をからかうのもいい加減にしなさい！…！」

落ち着けー。館内はお静かに叔父様！

その不届き者一人、外に捨ててきなさい！！！

とかいう館長命令で、俺は一人の腕を引っ掴むと、展示場から通路に引きずつて出た。展示場から離れた階段のところで、手を離す。

「悪いな。あの人、ちょっと真面目すぎるもんで、不可解なものとか、胡散臭いものとか、だらしないものとかにぶち当たるとキレるんさ」

一応謝つたけど、意外と気にしてないっぽいチョウジョウナント力のお二人。にいさんにいたっては逆に礼言つてきたよ。

「いや、助かつたよ。正直ああいう人は苦手でね～」「だろな。ぜつてえ仲良くなさそつ

תְּהִלָּה בְּשֶׁבֶת וְעַמְּדָה בְּבֵית

「菊池さん。随分な言われようのをわかっているか?さりげなく、不可解で胡散臭い、だらしがないと言わてるんだぞ」

おつと、そこ指摘するかね。夏城翠。しかし、目の中でかい人だ。  
典型的なかわいい系だね。

「金髪は館長の気に触らないんだな」

おつと。俺の髪のことか。

「ああ。これ地毛だかんな。天然モノには文句つけようが無いだろ。  
目が青いのもカラコンじゃないぜ」

でも、俺は日本人。ハーフ×ハーフの日本人。エイゴワカリマセ  
ン。話しかけるな外国人観光者？

「きれいだね」。いいなあ本物」

ボッサボサの髪の人羨まれても、な …。

俺的には、あんたの連れみたいな、長い黒髪とかも、かえって憧  
れるんだけど。ま、金パつて目立つし気に入ってるけどさ

「どもども。ま、その辺で茶でも飲んで、館長が落ち着くの待つて  
また来なよ。普段はあそこまで過剰な反応しねえから。じゃ」

仕事ガンバレ。俺は戻つて、この不可思議を観察すっから。

館長が落ち着くの待つて、また来なよ。

そう、金髪に言われた。

周辺の聞き込みに回つた俺たちは、一時間ほどして、再び博物館  
に足を踏み入れた。大方の調べに一区切りついたらしく、現場は閑  
散としており、館長の姿は見えない。先程の金髪の少年の姿も見

えないので、職員に尋ねると、応接間に通された。

「あ。ホントにきた」

…貴様が来いと言つたんだろうが。

苦笑いし、茶を運んできた永月空は、すぐて、館長をせきたてて戻ってきた。なだめ方がこなれている。

「まーま。やう言つたって、ティラノが戻るわけじゃないんだからく。使えるモンは使って、犯人捜して、弁償させようぜ」

俺たちが通された扉の反対側にある扉から、そんな声が近づいてきて、扉がほんの少し開いた。

「まさか、信用できるとでも？」

ドアの隙間から、館長の足が、踏ん張つているのが見えた。どうやら俺たちは、よほど嫌われたらしい。

「伯父様。古代エジプトの石版に、魔力があるって、信じてるんだろ？ だつたら、超常現象がぜつしたいに、無いとは限らないじゃん」「石版は、史実に根拠を見出せますが…」

「今の科学神話だつて、鍊金術のたまもんどう？ いいじゃん、減るもんじやないんだから、話してやれば。あつちだつて仕事なんだし」

館長が力負けしたのか、ドアからでてくると仏頂面のまま、卓に向かいに掛けた。後ろから来た永月空は、へらつと笑つて、なぜか伯父の隣に掛ける。

「…お待たせしました。それで、お聞きになりたいこととは

社交辞令以外の何物でない態度。今回に限ったことではないが、認知の問題か、俺たちが歓迎されることは少ない。…いや、この場合は、上司の所為か。

「ええ、じつは、このあたりを聞き込みましたら、妙な噂を耳にしました」

俺の上司、菊池さんの言葉に、田の前の男は、眉間にしわを深くする。

「…とこうと」

「半年ほど前に、改修工事をされたそうですね」

「それが何か?」

「その頃から、この建物で夜半、妙な人影を見たと。そういう方が、たくさんいらっしゃるんですが」

「…」

一瞬、けれど確かに、館長は横田で永田空のほうを見た。奴も気づいたらしげに、心に当たるところはないのか、茶をするついている。

「巡回の職員か何かでしょう。コレクションの警備は徹底しておりますので」

「…警備の方に、サンルーフや、貯水槽の上まで、見回りをさせておられるのですか?」

まだ。確かに、一瞬、館長は隣に注意を遣つた。金髪のバイトは、茶菓子を一つ、頬ばつた。菊池さんも気付いていははずだ。何

かを隠している。…少し、揺ゆかしてみるか。

「…気付いていたんじゃないのか」

「何でしょうか」

館長の声が、明らかに冷たくなる。

「この博物館に、出没する何かにだ」

「まさか。私がそんな不届きモノをほおっておくとでも？知つていれば、即刻警備を倍にしましたよ」

「…そうできない事情があったのではないか？」

館長は、鼻で笑った。その顔は、先程とは変わり、一部の隙もないポーカーフェイス。何かを読み取るのは困難だ。そのまま、館長は席を立つ。

「やはり時間の無駄だったようですよ。空君。話にならません

話を振られた永月空は、肩をすくめてカップを取った。

「そか。そりや悪かつたな、伯父様」

「お引取りください。お話できることはずべて、警察のまつこお話をめでひきの話

しましたので。それと」

振り返った館長が、もの言いたげに俺を見た。

「女の子は、足を開いて座らないように

…」のクソ爺。

「う、伯父さま…それ違う…」

永月空が何か言いかけていたが、考えるより先に、口が動いた。

「誰が女だ！？」

人のコンプレックスを刺激して、謝りもしないクソ爺は、きびすを返して応接間から出て行つた。菊池さんの、

「良くある」とじやないか。どうせ、後数回の仕合になんだし、押さえてよ」

と呟つ発言は、一理ある。が、世の中には許せない事といつ物も、存在する。

徹底的に、調べてやる。覚悟しろ、爺。

とばつちりを受けた、同僚たちの声。

「菊地さん…なんで夏城君の周りが、殺氣に満ちているんです？」  
「ん~リベンジに燃えてるんだと思うよ。しずちゃん  
…女に間違われたか、チビって言われた?  
「わわ！声が大きいです！」



出会いは突然? はん、冗談。思いつきりしつこに前置きあつたじゃん。（後

駄文にお付き合いいただき、誠にありがとうございます。  
次くらいで、一通り、主要キャラを出したいです。

## **捜査つて、難しい（前書き）**

…久しぶりになってしまった…。

## 捜査つて、難しい

捜査つて、難しい

空君、君ですか。余計なことを喋つたのは。

まさか。そこ今まで仲良くもないし。

ではなぜ、あのことを…。

田撃者が多すぎて、口止めが間に合わなかつたんだる。明人さんのせいじゃないと思つぜ。最近特に、よく出てたしさ。

… そういえばその、明人君はどうしました。

デンワしたら、熱が出たつてさ。あの人、チキンだから、幽霊博物館に出勤したくないだけかも知れねーけど。

よしなさいーーその呼び方は！幽靈だなんて！

つつてもさあ…もうネットとか、情報広がりすぎで、潰しても潰しても…限界つて奴だと思つ。

ああああ、もう…とにかくー元を何とか…。

簡単に言つけどさ。もう大抵の事はしてんだぜ？人間じゃ忍び込む隙間なんて無いってのに、出るんだもんよ。…本物のほうがまだ安心…。

馬鹿言わないで下さいーーー！

私は、博物館の向かいにあるカフェで、博物館の一室の会話を盗聴していた。傍目には、イヤホンもしていない私は、平日の昼間に暇を持て余しているように見えるんだろうな。

でも、一応私はお仕事中。<sup>はなむらじゅか</sup>花村静、十八歳。警察機構、超常現象対策課の捜査官です。只今、……博物館の館長室の音を盗聴中です。違法行為じゃないんですよ。……自分の力で聞いてるだけなので。

「…特に、事件に深く関わってるわけじゃないみたい。…博物館の評判に傷がつくるのを、嫌がって、隠したがってるんだと思つ…」

私の言葉に、<sup>きくわい</sup>菊池課長が、溜息をはいた。

「やうか～…、当事者が犯人だつたら楽だつたのに…」

部長、その発言は、どうなんですか…？

「…あと、空君つて子、かなり調べてるみたい。出没する時間とか。場所とか…」

「やはり、<sup>ながつきやさら</sup>永月空に話を聞くのが早いか…」

「…どうやって?」

私の隣で「一ヒーを飲んでいた怜君が、気の無い声で聞く。仕事で私とパートナーを組んでいて、私より一つ年下の、十六歳。つかみどりの無い男の子で、でも、私よりずっと落ち着いてる。ただ、基本的にやる気は無いみたいで、チョコレート色の前髪の向こうの目が、今日も眠そう。…でも、ちょっと可愛い。猫みたい。

「俺たちには話さないだろうな」

夏城君が、私たちのほうを見て、そういった。彼も、私よりも年下なのに、シッカリし過ぎてて、ちょっと怖い。

「幸い、永月空は人懐こい。野次馬の振りをして接触できる」

「え、まさか。

嫌な予感がしたところに、菊池部長が止めを刺していく。

「任せた。しづちゃん、怜

私、人見知りなのに……。  
なのに、なのに。

此処は、私立奏華学園高等部近くのケーキ屋。調査によると、永月空は毎週木曜日には、必ず此処に友人と来る。とか、夏城が言うので来た。どうでもいいけど、人が多い。儲かってるんだな、と、思う。

対象は、丸テーブルの四人席に友人らしき少年と、一人で座つていた。

どひじょひづか。

俺もあんまり、こいつの、得意じゃない。…けど、花村も頼りにはならないしね…。

「あの」

声を掛けると、青い田がこっちを向こうに回った。

…あ。花村、ちゃんと付いて来てる? 確認するのも忘れてた。  
「席が開いてなくて…」

眩きつつ、花村を探す。

視界にいないと思ったら。年上のくせに、俺の斜め後ろに隠れてた。

「ビーベ。デートの邪魔でないな」

「デート? ああ…花村と一緒にだから…。

「で…でーとー?」

花村がやたらに裏返つた声を出した。…にわとりみたいな?

「あれ、違うんだ? じゃあ、よかつたら、俺とかどう?」

「えええええ！？」

対象の友人に、ナンパされて、気が動転している花村はほつとこう。仕事しやすいし。

「愚ぐ陋く」ないと嫌われんぞ？」

永月空は笑いながら、席を詰めてくれた。たしかに。懷っこい。

「悪いね、あいつオンナノコ大好きなもんで」

隣に座つて、いかにも今気がついた、みたく切り出す。

「あれ、ひょっとして、博物館のニュースで映つてた」

「またか。俺、そんなに目立つ？」

ちよつとうんざりした顔をする。どうやら、散々聞かれたらしい。  
綺麗な顔してるから、この機会に声かけた奴も多そう。

「うん。金髪なんて、そんなに居ないし。」「ん？ 答えられる範囲なら」「聞いていい？」

イチゴのタルトを幸せそうにパクついている、永月空。特に警戒しては居ないみたいだ。

「幽霊が出るって噂。本当?」

「それも、またか、だなー。答えられねえのよ、俺は。伯父様にシメられる」

てことは。

「出るんだ?」

「守秘義務がアリマス」

「こんな噂になつてるし、もう諦めなよ」

じつと、空は俺を見て、黙り込んだ。怪しまれたかな。

「……………それ、くれたら、も一つへりこ答えてやるよ」

空がそれ、とフォークで指したのは、俺のトレーの上のロールケーキ。この店の一一番人気だといつから頼んだものの、まだ手をつけない。…意外と手軽?

「いいよ。じゃ、幽靈について、教えて」

「幽靈…っていうか、誰か、だと思つ」

「誰か」

「複数の監視カメラに、僅差の時間に映れて、忽然と消えられる、誰か」

「…人つてこと?」

「それがわからんねえんだよな…同時に画面に残らない。けど、こっちの画面から切れたと思つたら、全然別の画面に入つてきて、切れれる。堂々と映る割には、黒い布的なもん被つてるし。足はある」

「…男?女?」

「ん~…小柄な女か子供かな。子供だと思つけど。男の」

「…なんで?」

また、永月空は青い田で、じつと俺を見る。長い。

「……なんでそんな熱心に聞きたがんの？アンタ」

……変に思われたかな。

「興味、あるから」

……苦しい。我ながら。

永月空が、フォークを歯でかんだまま、ニッとした笑った。

「……ふうん」

俺は、基本的に、心が表情に出ない性質たちのはずだけ。この子の青い田は、どうも何かをわかつたような色をしてる。

期待薄……だめかも。

「足がさ、裸足なんだ。子供っても、たぶん中学生くらいかな。筋肉とか骨とか、男子っぽいんだよ」

「へえ……」

答えてくれるとは、思わなかつた。

感心した振りをしていると、ロールケーキを口に運びながら、空が言つた。

「……って、言つたら、信じる？」

……。

「…嘘ついた？」

「ああ？ ただ、あんまり素直に聞いてるからか。ふつへ、『うわ～』とかあるのに」

「…おかしい？」

「どーだろな。『ひかわまーじゃなー俺わ帰るわ』

帰られた…て嘘つか、逃げられた。

…菊池に嫌味いわれるな。

そういえば、花村いないけど、ビーフしたんだね？

「あれ、どしたのーー一人してそんなげんなりして」

「花村が対象の友達にナンパされて付いてつて、迷子」

「怜くん！違うのーーだつて、妹さんの誕生日プレゼント選ぶからつて、頼むから…」

「静ちゃん、怪しいとか思わなかつたのかい？」

「思つたけど…」

「そんな事より、菊地さん。報告書が出来たんだが、田を通してく  
れ」

「そんなことつて…夏城君、酷い…」

捜査つて、難しい（後書き）

小説つて…難しい。

モニターの前で夜更かし、つたら、夜食は必須だろ（前書き）

久しぶりなので、続けてUP。

モニターの前で夜更かし、つたら、夜食は必須だろ

モニターの前で夜更かし、つたら、夜食は必須だろ

おい、聞こえていいんだろ?。返事へりへりしたうどいだ。

…うるせえ。それどじやねえよ。

おい、このまま力を押し隠していく気か。騒がれてからでは遅い  
んだぞ。

……。

「……う。拒否できるようになってきたな

公園の敷地の一角落に立つ、白い円形の建物。その窓際で、交信が途絶えた。つい、舌打つと、菊地さんが振り返った。

「ん? 例の声かな?」

ぼさぼさの頭をして、嬉しげに目を細めている。菊地さんにとって、仲間が増えることは喜ばしいのだ。超常現象対策課は、年中人手不足。俺たち調査員と違つて、課長ともなれば、色々と氣を使うのだろう。

……俺の知ったことじゃないんだが。

「ああ、遠くはない。やはり、一度会わなくては交信しにくいな。あちらに、その気がありさえすればいいんだが」

どこに居るかわからない、その誰かは、この頃、話しかけると無視をしたがるから、説得も容易でない。どこの餓鬼か分からないが、見つけたら一発殴りたいくらいだ。面倒な。

「精神感応ですか…<sup>テレパス</sup>会つたことも無い相手につなげられるなら、かなりの能力値だ…」

早く就職して欲しい、という願いに満ちた目を向ける上司が一人。

「…最近は、俺の“声”を拒否できるようになつてきている

能力地が高いのはいいが、それを使って俺をてこずらせるのは、いただけない。何時繋がるものやら知れないから、業務時間外まで、働きかけなくてはならない。いい加減、俺が疲れる。

「随分、つながるようになりましたね。相性がいい

いいはずあるか。無視。拒否。言い争いの毎日だぞ。

「偶然だ」

「偶然というには、繋がりが深くないですか?毎日ラブコールして

いるくせに

その手の「冗談はよせと言うのが、未だ分からぬのか」この人は。アンタもいい加減にしてくれ。殴り倒したくなる。

「その言い方はよせ。好きでやつてるわけじゃない」「怒ることないでしょうに」

「でも、昨日博物館を見に来てた人の中には、居るんですね？」

苦笑した男の隣で、花村が、おずおずと口を挟んだ。  
潜入捜査だと言つのに、なぜフリルやらレーースやらの集合物を着てくる？

「バス交信で、本人が零していった言葉からするとな。居たはずだ」「どんな人ですか？とか…」

せめて、その栗色巻き毛についた、巨大なりボンを取れ。目立つすぎだ。

「…もあな。聞こえてくる声はやたらと能天気な咳きだ。この事件に対する反応からすると、相当に好奇心が強いのだろう

「女の子？男の子？」

「一人称が『俺』だ」

答えを聞いて、花村は少しがつかりしたらしい。男ばかりの職場に、女友達が欲しかったのだろう。

ここは深夜の博物館。忍び込んだ俺達四人は、違法捜査の最中だ。佐野が、いかにも眠そうに呴く。

「…で。どうすんの

忍び込むところまでは忍び込んだのだが、静の透視能力を以つて、各所を探ると、この先に死角はない。監視カメラがここまで多いとは、流石、永月一族。忍び込まれることに、慣れている。とはいっても、何時までも立ち往生しても……。

「つ

明らかに俺たちとは違つ息遣いが、息を呑んだ。視線が、背中に刺さる。

しまった。

光が、俺たちを照らし出す。

「おい、お前らー!誰の許可得て、入り込んで……」

「キヤ

「ツツ……」

絹を裂くような悲鳴といつのはこれを指す言葉だろ？。

傍にいた俺たちはもちろんのこと、声をかけた影まで、逆に驚いた。思わず、耳を塞いで、懐中電灯を取り落とした。

ガンッ。

「~~~~~つの…」

影が、憤慨したように抗議した。

「博物館で騒ぐな！不法侵入者のくせして…ん？」

影が、怪訝そうな声を出し、近づいてきた。ぼんやりと姿が見えてくると、知った顔だ。ガラスを通して街の薄明かりに、金色の髪が煌めく。整った造作と、白い肌。薄闇の中でも、瞳の色が明るいのがわかる。花村も、佐野も、菊地さんも、気がついた。

「『』めんなさ…あ  
「あ

「あれ、空船」

「…う」

見回りをするには少々若い、小柄な人物は、呆れたように言った。

「『あれ、空船』じゃねえよ。あんたらな。ケーサツだからって何しても許されると思つたなよ。訴えちやつて、コノヤロー」

それはまずい。元々、警察内でも、胡散臭いだのなんだのと、爪弾きにされがちな部署。クレームがつくと、すぐさま菊地さんが『エライヒト』に、呼び出される。

「やあ～、だつて、上が許可くれないし、それ！」

一応は責任者のはずの上司が、頭をかきながら言い訳する。永月空は、腕を組んで、困ったヒトを見る目で、菊池さんを見上げている。

「ケーサツの人なら、他に来てるぜ。あんたらの仲間じゃなさ氣だけど」

「そう。彼らがねー、僕らの邪魔するからつづるしかなかつたんだよ」

「どっちがどっちの邪魔だろーが、関係ないね。とりあえず出でけよ。監視カメラに映るとソックで、刑事さんがモーター室から飛んできて、伯父様が訴訟手続きするぞ」

予想よりは好意的な言葉だ。菊地さんが少し肩から力を抜いた。悲鳴を上げて怒られた花村が、佐野の陰に隠れつつ、恐る恐る訊ねた。

「…かばってくれるの？」

「…アンタとアンタ」

花村と佐野を見る。

「ケーキ屋にいたよな？チヨウジヨウ何たらのお仲間だったんだな

「…怒つてんの」

黙つてたこと？

佐野の言葉に、永月空は笑った。

「別に。俺でもそーするし。ケーキ、奢つてくれた礼に、見逃してやるよ

随分お人よしだな。いいのかそんなに信用して。つけこむ方としてはありがたいが。

「…なら、また奢つてやる。だからもう一つ、協力しない

そういうこと、永月空はあからさまに嫌な顔をした。

「……お前、面の皮ぶあつついなー。びっくりするわ

「俺だけがここに居たことにして、そのモニター室に『連行』しちゃ

言い訳くらいは考えてやる。全てが嘘と言つわけではないし、俺の単独行動なら、まだ始末書で済む。

「しかも、上からかよ？やだね、無駄に連れてって伯父様に大目玉食うには、報酬が釣合わねえし

「ならば、釣り合の報酬とはなんだ」

「そのまま帰つては、来た意味が無い。懐柔できる隙は永月空だけだ。

「ん？ ん 」

しばしあつて、思いついたらしい永月空は、期待に満ちた顔を向けてきた。

「公園通りにあるアンティークショップにて、いーにカップがあるんだ？ フランス料理食べれるへりこするやつ」

博物館の手伝いをしたがる人間は、欲しがるもののが違つらじい。ともかく、答えは決まっている。

「わかつた買つてやる。菊地さんが

「ええ！？」

「おーマジか 忘れんなよー、忘れたらチクリやけりやせ?」

「ちょ、ちょっと!」

「行つてくる。菊地さんたちが、歸つてくれ

強制的に話を終わらせて、永月の後ろに付いてゆく。後ろから何とか聞こえた気がするが、気にしないで置くのがいいだらう。

「いやいやいや、翠君<sup>みどり</sup>…? なんで僕が

とこかく今はモーター室だ。

「食う？」

「ああ」

俺の作ってきた夜食用サンドイッチをパクつきながら、翠さんはモニターを見つめる。

ん~、うまっ やっぱバケットにしてセーカイ 粒マスターでも利いてるし

肩を並べてモニターを見てると、性慾りも無く、普通のけーじさんがモニターの一つをうわうわしてる。「行つても無駄」って、散々言つたのに。見つからない不審者を探しに出て行つてしまつたオッサンは、真人間だ。

「クソまじめで立派だなあ…。石田さん」

フツウ、三回行つて、何も見つかんかったら、やんなつて行かなくなるだろ？？俺ならありえね。

「それだけが取り得だからな」

空腹だつたらしい美人さんは、モニターを見つめたまま、そう返してきた。言葉はアレだけど、口調に嫌な感じがねえのが以外。

…て言つか、てめ、喋るときくらい食つのやめうよな。それからもつと味わつて食えゆつくり食え。てか、石田さん達の分残す氣ねえだろオマホ。

「なんだ。仲悪いんじゃねえんだ」

あ・しまつた。最後のスマートサーモンサンド食われた。

「よくはない。俺たちの邪魔をするからな

「ははは。頭固そーだしな」

『超常現象なんてありもしないものの為に、税金を使いおつて…』

とか言つたもんな。こつちが嫌いじやなくとも、あつちはナ力ヨクしてくれなさき。

「…で、なんか判つた?張り込み一田田<sup>せきださんじゅ</sup>」

伯父様と石田さん口説いて、翠がここで張り込めるよつにしてやつて、一田田。眼鏡のにいさんに買つてもらつた、二ユーボーンのカップで飲む紅茶は美味しいけど、別にこれだけの為に、コイツを入れてやつた訳じやねえのよ。

専門家の意見つて奴、聞かせろよ?

「いや。お前とさしてかわらん。おそらく、瞬間移動か幻術能力者だろうが…問題は田的だ」

テレポート

なんだ。ホントに変らん意見だ。

「だなあ……」

溜息もんだ。先が見えねえ。

ポットから、例のカップに新しく紅茶を注ぐと、今日張り込み始めてから、初めて墨がこつち向く。長こ指には、しつかりサンドウイッヂがホールドされている。

うわ。二つの間にか、サンドが食べられていり。

「お前のほうが、そのあたりに迫つてこられるのではないか

「……俺？」

奴にも紅茶を注いでやる。

別にいいけど、この茶葉、ダージリンのファーストフリッショウだぜ？好みはあるんだろうけど、せめて一口田へらいストレートで味わえよ。問答無用でミルクと砂糖（しかも三杯）ぶち込むなよ。爽やかさが消え去るだろが。つか、俺の特製サンドをそれで流し込むな！

「毎間に永月一族の関係各所を、うひついているのだらつ。……かなり前から」「……あれ、やっぱ俺田立つのな。そのうひばれるだらうとは思つてたけど」

警察だもんな。そんぐらい、調べつけやすぐか。

「それで成果は？」

「俺の収穫、堂々と横取りしようとするあたり、國家権力だよな…まあ、いいけど。どうってことねえよ。永月を恨んでる奴なんて、星の数だし？叔父をまだつて、ちょっと今まで、某有名企業の社長だつたんだし」

…つまり、心当たりが多くて、お手上げ、つて」と。

肩をすくめて見せる。

おい「ハ、そこで鼻から息を吐くな。自分だつて対して収穫無いくせに。つとに…かわいくねえな。…」

「まあ、嫌がらせにしても遠まわし過ぎる感はあるか…」「…伯父様に直接危害を加えてないから?でも、ダメージは最上級だぜ」

「館長の展示品に対する入れ込みようを知っていた者は」「多すぎるつて。職員だけじゃねえし。会つた事ある人なら、大抵知つてんだ。そっちも砂漠の砂ほじりのつての」「…靈障と言う線も考えられる」

「レイショウ?」

「読んで字の如く、靈によりもたらされる障害だ」

「…それ、まあ…調べる方法あんの」「見える奴がいればな」「いんのかよ」「此処にいる。…おい、見

「う、あああああああーーまたでたあああああーー」

「 「 … 「

美少女的美少年が、俺に「見ろ」と言い切る前に、せっかく空氣のよにモニター室に存在してた、わっかいけじさんか、この世の終わりのよな声を出した。目の前の美少年は、眉間にしわを寄せて、これ見よがしに溜息をついて、舌打ちする。

……気持ちはわからんでもないけどさあ…アンタ。

無視もかわいそつだから振り返ると、スーツ着たにいさんがパニック。普段はそこそこイケメンなんだろうけど。まあ…残念な感じ?

「だから、大人しく帰つとけよ武本サン。この搜査、向いてないつて」

出たびこれで、出ないときは隅のほうで毛布に包まって蹲つてるんだから、邪魔だし五月蠅いし、いくら先輩（石田さん）と、上司が怖いからつて、居てもらつてもしようがねえんだけど。

修復室の画面に、靈の足。こつもと違うのは、しつこい度も力

メラの視界を横切ったこと。

ああクソ、また悪化したわけね……。

「…そつちの線の見立ては?」

そつち=靈障。眉睡ばなしに、いちいち適応しなきやならないこの状況が憎いぜ

「今のところなんとも言えん」

と、美少年。

うん、君は悪くない。分かつてる。解つてるよ?……でも聞いた  
い。

何とか・し・ろ・よ

「…左様ですか。どうしたもんかな~」

後ろで、武本サンが悶えてるけど、もういい加減ツッコムのは疲れた。俺がガシガシと金髪を搔く横で、モニターを見ていた翠サンが、今日始めて俺のほうを向いた。

「?なに

モニター以外の方向見ると、メズラシイ。よっぽど何があるのかと思って、俺もそつちを向いてみた。

「疑わないのか？」

「え・なんだそれだけ?」

俺は肩をすくめて見せると、伯父様から預かつた、鍵束をベルトから外した。

ガシャツッ。

金属のぶつかる音が、室内に響く。そのまま、鍵を探しながらやべる。

「今更だろ。揃って博物館に忍び込めた時点で、常識外の方法でなきや、無理だつての。本人が見えるつてなら、見るんだろ」

「嘘かも知れんぞ」

「嘘つく理由、ねえだろ? 大概は信じないんだろうからさ」

「…醒めているな」

「あんたにや言われたくないね」

どの口で言つてんだよ。お。鍵発見。

「…悪いけど、俺ちょっと見てくるわ

椅子から立ち上がると、まだこつちを見てた美人さんと田があつた。

「修復室、か？」

「修復中の石版がなー。ナンカあると困る。伯父様が嘆くからさ」

行きたか無いんだけどさ。

「何かあつたところで、お前が止められはしないこと思つが  
「わかつてるって」

すぐ戻るからロロシク。

言つて、モニター室から出よつとしたが、

「…！」

腕ヲ掴ムモノ有り。

「…おい？」「俺も行く」「は？いいよべつに」

そういうキャラなの、お前つて？

聞く前に、耳を劈く《つぶさく》悲鳴。

「ぎゃあああああー！僕を一人にするなああああー！」

「「…」」

部屋の隅の毛布のカタマリが喚いた。

…なんか、イラッヒキタ。それは俺だけじゃないらしい。

俺の腕を掴んだまま、美人さんが、繰り返した。

「…俺も行く」

「武本さん、置いてつて石田さんに何かいわれねえ？」

「俺が知るか」

「…じゃ、俺も知らね」

モーターの前で夜更かし、つたら、夜食は必須だろ（後書き）

サンドイッチは、バケットです。私的に。

そろそろ、本格的に話を動かさなくては…と、思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8526/>

---

うろんな+せいぶつ

2010年10月16日11時13分発行